

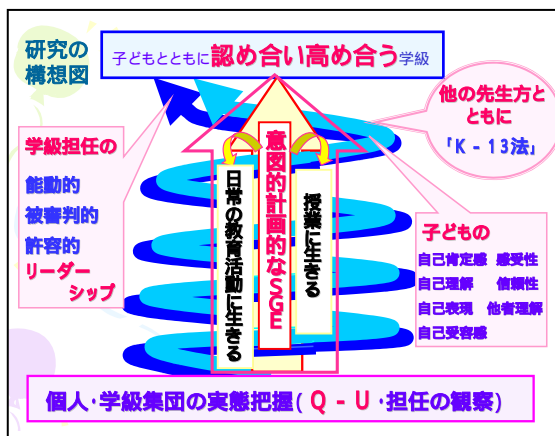
1. 研究テーマ

子どもとともに認め合い高め合える学級づくりをめざして ～ Q - Uを活用しながら ～

2. はじめに

今、学校では、仲間づくりが苦手な周りの友達とうまくつきあっていけない子どもや自分の不安や悩みをうまく解消できず、それがいじめ、暴力行為、万引きなどさまざまな問題行動として現れている子どもが増えてきている。しかし、新学期1日目の児童にアンケート調査を実施してみると子ども達の心の中は「自分のよさを知りたい」「友達をもっと増やしたい」「こんなことができるようになりたい」と新学期へのわくわく感でいっぱいであることがわかった。そこで、そのわくわく感を大事にしなが、子ども達同士、子ども達と担任がぬくもりのある雰囲気の中で「認め合い高め合える」人間関係を育てていける学級経営のあり方を探りたいと考えた。

3. 研究の概要



< 目的 >

学級の実態把握の方法を探る。
分析に対して効果的な対応策(手法)を探る。
「子どもとともに認め合い高め合う学級づくり」のためのカレンダーを作る。

< 仮説 >

子ども達のわくわく感を大事にしなが、学級の実態や教師のかかわり方を分析し、対応策を考え、意図的計画的に学級経営を実践していけば、お互いに認め合い高め合える人間関係を向上させることができる。

4. 本研究の内容

< Q - U >

教師の日常観察や面接法による児童理解の限界を補い、児童個々の状態および学級の状態を理解するための診断尺度

学校生活意欲尺度 友達関係・学習意欲・学級の雰囲気把握

学級満足度尺度 児童や学級集団の状態、児童と学級集団の関係把握

< 構成的グループエンカウンター(SGE) >

集団のメンバー同士が本音で語り合う人間関係の体験を通して自己理解や他者理解、相互の人間関係を深め、自己の成長や対人関係能力の育成をめざす。

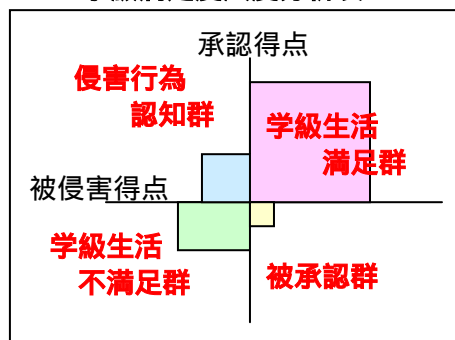
< K - 13法 >

グループになって学級の問題となる点の対応策を13ステップで討議する。

大切なこと

教師に原因を求めない 普通にできることを！
教師間のチームワーク 互いに力をつけ合う

< 学級満足度尺度分析表 >



5. 検証授業の展開

第1回Q-U (5.24.)



友達関係 9.8
学習意欲 9.5
学級の雰囲気 8.8

< 学級集団の特徴 >

学級の50%が満足群にいる。
ななめ楕円になっていて、みんなから認められていなかったり友達関係がうまくいかなかったりする児童もいて満足度に差がある。

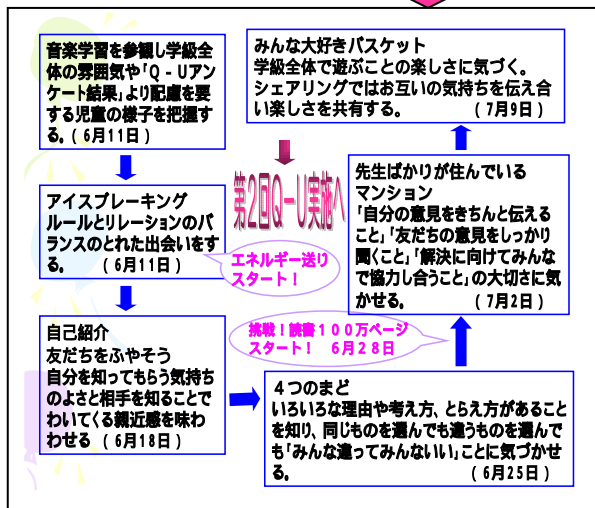
< 分析 >

1. 前学級の人間関係を引きずったままで新しい友だちのことを知らずとしていないのではないか。
2. みんな「5年2組の仲間」という意識がまだ薄いのではないか。
3. 自分が5年2組になくなくてはならない存在であることが実感できないでいるのではないか。

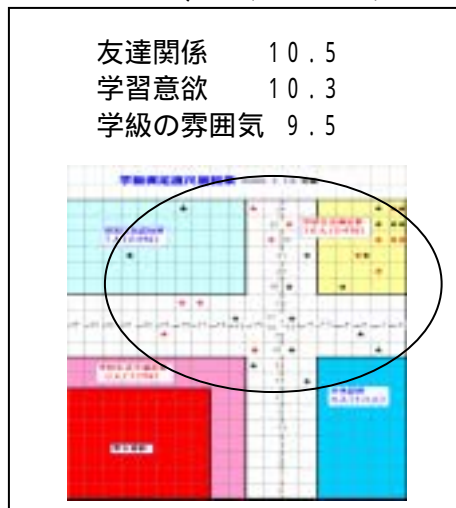
< 対応策 >

1. 自己理解・他者理解をねらいとしたSGE
2. みんなで解決できた喜びが味わえるSGE
3. ひとり一人のがんばりが学級の力になることを実証できる活動

第 期 5月～7月



第2回Q-U (7.14.)



3. < 学級集団の特徴 >

学級の50%が満足群にいる。
まだルールが定着していない。
不満足群児童の承認得点がアップしている。

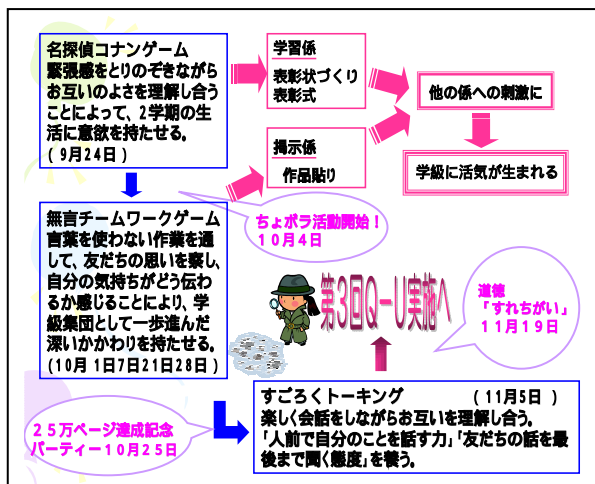
< 分析 >

1. 子ども同士が馴れ合いになってきているのではないか。
2. 高め合おうとする意識が弱いのではないか。
3. 自分はみんなから大事にされているという実感が持てない児童がいるのではないか。

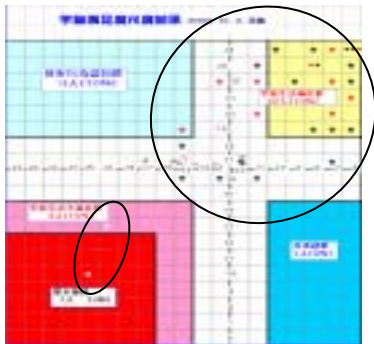
< 対応策 >

1. SGEのルールをしっかりと守れるように進めていく。
2. 同じSGE「無言チームワークゲーム」を少しずつレベルアップした条件で実施
3. 多くの友達とかかわれるような活動「ちょボラ活動」の実施

第 期 7月～11月



第3回Q-U(12.3.)



友達関係 10.9
 学習意欲 9.8
 学級の雰囲気 9.9

<学級集団の特徴>

学級の73%の児童が満足群にいる。
 その他の児童も満足群に近いところに位置するようになった。
 2名の児童が学級の勢いに取り残されている。

<分析>

1. 2名の児童と学級のペースとが合わないのではないか。
2. お互いのよさにまだ十分に気づき合えていないのではないか。
3. 2名の児童は休憩時間や放課後に友だちと思いきり遊べていないのではないか。

<対応策>

1. SGEを取り入れたカウンセリングの実施
2. 自己肯定感を高め、和やかな人間関係をつくるSGEの実施
3. 「K-13法」で話し合った「週1回「みんなで遊ぶ日」」を子ども達に提案

6. 研究のまとめ

「子ども達のわくわく感を大事にすること」
 「学級の実態や教師のかかわり方を分析しておくこと」を前提に対応策を考え、意図的計画的に実践を積み上げていくことが大事である。

「Q-U」調査と学級担任の観察をもとに実態を把握し対応策を考え、意図的計画的に構成的グループエンカウンター(SGE)を実践していけば、認め合い高め合える人間関係を向上させることができる。

「K-13法」を実施することにより、参加者全員が「学級は一人で育てるのではない。みんなで育てていくのだ。」と気づくことができ、その気持ちが学級経営に反映される。

学級は常に変化している。だから、常に「実態把握」「対応策」「実践」の繰り返しが必要である。

7. 今後の課題

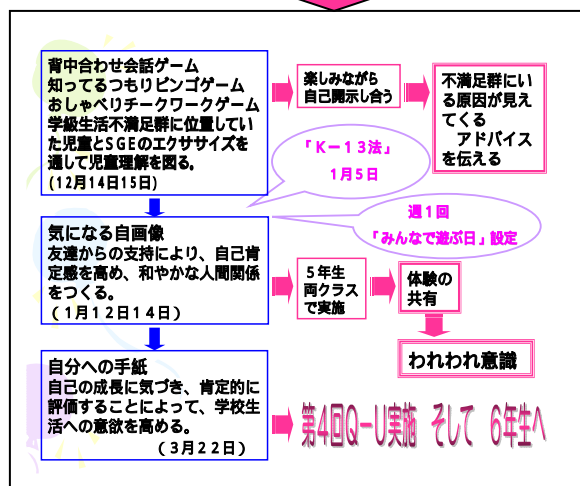
SGEを学活だけではなく他教科他領域にも広げていき、年間指導計画に位置づける。

「開かれた学級経営」を推進する。

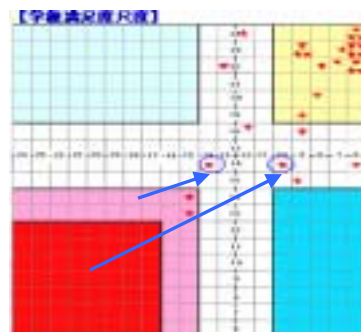
別冊「学級経営」のSGEオリジナルカレンダーをよりよいものにする。

8. おわりに

今後は「Q-U」「SGE」「K-13法」を積極的に活用し、「認め合い高め合える」学級をめざしてさらに実践を積み上げていきたい。また、子どもを育てていくことに責任を持ち、自分も共に育ててもらっているのだということを忘れないで、その先にある喜びを共有できる日を楽しみにしながら子ども達との時間を大事に過ごしていきたい。



第4回Q-U(3.22)



友達関係 11.0
 学習意欲 9.9
 学級の雰囲気 11.0